

鹿児島県知事賞

分け合った小さな種

鹿児島大学附属中学校 一年

住吉 絵美理



「運転手さんに小さな種をもらったよ。」
と、帰宅した私は声高に母に話しかけた。
「えっ、何の種。」

と、母は興味深く耳をかたむけた。
それは、あるバス停での話だ。小さな子供を抱いた若いお母さんが、
「運転手さん、すみません降ります。」

と、あわてて席を立とうとすると、
「この先で降りるのではなかったのですか。」
と、運転手さんは聞き返した。すると、

「子供があまりに泣くもので、ここで降りることにします。」
と、お母さんは言った。即座に

「みなさん、お母さんが、子供が泣くのでここで降りますと言っています。
す。どうかこの先まで乗せていてはどうか。」
と運転手さんが車内放送をした。その瞬間、小さな拍手がおき、その後

大きな拍手へと変わった。

「今日は、この心温まる話を話題に、クラスで乗客やお母さんに対する
運転手さんの細やかな心配りについて話し合い、運転手さんの人を思い
やる温かく小さな種をクラス全員で分け合ったの。」

と詳細を母に話した。

それから数日後、私は下校途中に電停で雨の中立っている男の子と出会
った。お母さんが迎えに来るのを待っているのかなと思いつながら、しば

らく見ていたが、誰も傘を持ってくる気配が感じられなかった。信号が
青になると、男の子は私と方向に歩き出した。私は、雨にぬれてかわい
そうに思う一方、周囲の目を気にしながら、

「ねえ、一緒に傘に入らない。」

と、声をかけた。男の子は無言で入って来た。私は、男の子に不安を感
じさせないように、

「何年生、一人で帰るの。」

と、たずねた。男の子は、

「小学一年生、スイミングの帰りなの。妹が小さいので、お母さんは妹
の世話をしているから、ぼくは一人でがんばるんだ。」

と、答えた。そして、男の子が雨にぬれないように気遣いながら歩いて
いると、男の子は、

「ぼくの家は、すぐそこだよ。ありがとう。」

と言って走り去った。男の子は何度も振り返り頭をちょこんと下げて手
を振った。私も手を振り、さよならの笑顔を送った。ほんのすこしの間、
傘に入れてあげただけだったが、男の子と別れてからしばらくの間、言
葉では表現できない晴れやかな気持ちになった。

そのとき、私は、ふとクラス全員で分け合った思いやりの小さな種
のことを思い出した。男の子へ差しのべた傘も、きっと小さな種だったか
もしれない。けれどももうした小さな種を少しづつまいていくことが大
切であると私は思う。そうすれば、いつか私たちの周りは親切の花の咲
き誇るすばらしい世の中になるだろう。

〔審査評〕

バスの中で、乗客やお母さんに対する細やかな心配りをした運転手の
行動について書いています。その運転手さんから学んだことを印象深く
書いた作品です。運転手さんからももらった小さな種を学級の友人にも広
めクラス全員で分け合ったことは作者の優しさを表現しています。その
ことから作者自身も積極的に小さな親切を実行していることはすばらし
いことです。

